

「文化財保存修復学会誌（古文化財之科学）」投稿の手引き（1）

2014. 06. 18 改訂

2003. 06. 07 改訂

1996. 07. 19 改訂

1989. 06. 07 制定

1. はじめに

この「投稿の手引」は、論文を執筆する際の指針として投稿規程 3 により設けられたものである。学術論文の執筆と構成を定めた SIST 08：2010 を尊重し、投稿に当たっては、体裁の整った、読みやすく理解しやすい論文を書くことを願います。

2. 投稿論文

2.1 投稿論文の種類

投稿論文は、文化財に関する「報文」、「事例報告」および「資料」とし、保存修復分野に寄与する内容を含み、かつ他の論文誌に未発表のものに限る。

- 「報文」とは文化財に関し、正確性と再現性を有した手法で行われ、必要な考察を伴った価値ある結論を含むものをいう。
- 「事例報告」とは、会員にとって有益な、文化財の保存や修復などに関する具体的な事例報告をいう。
- 「資料」とは、会員にとって有益な、文化財の保存や修復などに関する資料（文献史的な研究や正確で再現性のある網羅的な実験結果などを含む）について、新しい切り口からまとめたものをいう。

2.2 投稿論文の形式

〔構成〕

投稿論文は、本会所定の投稿カード(別表 1)と次のものから成る。投稿カードを含め、すべての電子ファイルを投稿時に提出すること。

1. 表紙(別表 2)、2. 題名(英文および和文)、3. 本文(図、写真及び表の説明を含む)、4. 図・写真・表、5. 英文要旨、6. 和文要旨、7. キーワード(英文および和文)

1. 表紙

投稿論文には、本会所定の表紙をつける。著者の数が多い場合は別紙を用いる（複数枚にわたる場合は番号を付記する）こと。現在の所属機関が研究の行なわれた機関と異なるときは脚注に書くこと。

2. 題名

題名は、論文の内容を的確に示したものであること。一連の研究である場合は、その大題名及び前報の著者名、所載文献を脚注に書く。大題名は途中で変更しないこと。表題は内容が的確に示されるよう、方法、対象などを盛り込み、あいまいな表現は避けること。表題には国際的に普通名詞化したものを除き原則として商品名や略語を用いないこと。また、（ ） も使用しない。

3. 本文

本文は、論理的かつ明確な構想に基づいて記述する。研究の目的、保存修復上の意義、先行研究との関連性を明示する。使用した手法や技術は、同分野の研究者が読んで検証可能なように記述する。結果とそれに対する考察は、明確に区別して記載する。序、実験、結果、考察、結論などの見出しをつけて書く。投稿中の論文、未発表データ、私信などは重要な資料として用いないこと。

4. 図・写真・表

図・写真の説明、および表は原則として英文とする。「事例報告」と「資料」に限り、日本語も可とする。

図・写真と表は必要最小限にとどめ、多くても10枚程度とする。同じ内容のものを図と表の両方で表わさず、いずれか一方にする。そのまま入稿可能な良質な原稿を提出すること。

5. 英文要旨

英文要旨は、本文の内容を忠実に、かつできるだけ詳しく伝えるように書くこと。タイトル、著者名、研究を行った場所、本文で構成する。英文要旨は本文と独立に理解できるようにし、本文中の図、写真、表、式や他の文献などを引用しないこと。

6. 和文要旨 和文要旨は英文要旨を日本語に翻訳したものであること。日本語タイトル、著者名、研究を行った場所、本文のすべてを記入する。なお、本要旨は英文要旨の英文添削に用い、会誌には掲載しない。

7. キーワード

キーワードは投稿論文の内容を表わす語を5個程度選び、日本語と英語を並記する。より重要と考えられるものから順にセミコロンで区切って並べ、終わり

はピリオドとする。原則として小文字を用い、固有名詞の先頭及び慣用的に大文字を使用するところだけ大文字を用いる。

〔文体・字体〕

文章は平仮名書きで、常用漢字と現代仮名遣いを用い、平易で簡潔な「である」体とする。

用字用語、記号、符号、単位、並びに学術用語及び学術的名称（動植物の学名、病名、化合物名等）の表記は、ISO等の標準化関連国際組織及び国内組織による基準に従う。この基準に該当しないものは、本誌指定の書式・字体によるものとする。

〔用紙〕

投稿論文は、A4判縦長の白紙に35字/行程度（活字サイズで12ポイント程度）30行横書きに記入し、左右約35mm程度、上下端に約35mm程度の余白を設けること。行間を査読のために十分に取ること。原稿の下部にはページを入れること。

〔長さ〕

論文は、原則として刷り上り8ページ（所定の原稿用紙20枚程度）以内とする。本委員会が認めた場合は刷り上りで最大10ページとする。本会規定の枚数を越える超過ページについては、印刷実費を著者の負担とすることもある。

2.3 投稿論文の書き方の詳細

〔区切りと見出し〕

本文中の大見出し、中見出し、小見出しは、1、2、3、……、1.1、1.2、……、1.1.1、1.1.2、……等と書く。大見出し、中見出しの前は1行あける。小見出しよりさらに細分を要するときは、著者の分類に委ねる。

〔こまどり〕

本文は書き出し及び改行後の書き出し部分を1コマあける。また見出し番号の次ぎも1コマあける。そのほかはすべて左詰めとする。本文の句読点は、句点（。）、読点（、）とし、ピリオド「.」やカンマ「,」を用いない。句読点は1コマを占める。

〔用語〕

学術用語は、文部科学省、JISまたは関連学会などで定めたものに準拠する。化合物名は、原則としてIUPAC命名法にしたがい日本語で書く。ただし論文が簡潔になり紛らわしくない場合には、元素記号及び簡単な

化合物の化学式を本文中に用いてもよい。略語を本文に用いるときは、慣例のものを用い、初出の際に正式の名称を () にいれて付記すること。外国の人名、会社名などは、アルファベットを用いて書くことを原則とする。本文中に引用する人名には、敬称をつけない。著者が複数の時は第一著者の姓名だけを引用し、その他を略して“……ら”で記す。

〔単位記号〕

単位は国際単位系 (S I) を用いることが望ましい。量および単位を表わす記号はなるべく J I S および計量法で規定されたものを用いる。(付記参照)

〔脚注〕

脚注は、本文の下に境界を表わす横線を引き、その下に記入する。本文中での記号は右肩に ^{注1)} などをつける。

〔引用文献〕

本文中での引用文献は、引用箇所の右肩に、番号を小さく ²⁾ のように記入し、本文の末尾にまとめて記載する。文献は直接参照したものを引用すること。(付記1参照)

〔図、写真と表の番号〕

図、写真、表の番号はそれぞれ Fig. 1、 Fig. 2、……、Photo. 1、 Photo. 2、……、 Table 1、 Table 2、……とする。

〔ふりがな〕

難読文字に関してはふりがなをつけること。

以下に、本文の執筆例および印刷時の指示の方法例を示す。

[本文の例]

2. 2 厚みの推定

上付き下付きの指定。読み誤まりやすい文字にはフリガナで指定。

r_A (既知) と r_B (未知) の2種の厚みを持った同種の金属があるとする。厚み r_A の金属と厚み l_A (既知) の銅板, 厚み r_A の金属と厚み l_B (既知) の銅板とが, それぞれフィルム上で同じ濃度を与えたとする。次式が成り立つ。

$$r_A = (l_A / l_B) \cdot r_B \dots \dots \dots \textcircled{1}$$

実験では, 既知の部分の厚み r_A は約 1.2 cm, これと等価な銅の厚み l_A が 0.7 cm, 厚み未知の底部のフィルム濃度に対応する銅厚 l_B が 0.4~0.5 cmであった。①式に代入して計算すると底部の X 線透過厚み r_B は次の値となる。

$$r_B = 0.7 \sim 0.9 \text{ (cm)}$$

3. 合金の密度

X線吸収係数 μ は, 密度 ρ と質量吸収係数

注1) この場合, 散乱線の影響を無視できると仮定している。

原稿は A4 判を用いる。手書きの場合は縦長でもかまわないが, なるべくこの見本のように横長の用紙にワープロで打ったものが望ましい。

Fig. 1

図・写真・表の挿入位置を指定。

普通使わないギリシャ文字などはフリガナをつけて(ギ)と指定する。